

日本語学習者の文章表現にみられる 伝聞「そうだ」の分析

— 論説文引用マーカーとしての文体的適切性 —

高野愛子・石田恵里子

【キーワード】 伝聞、そうだ、引用、文体差、情報源、教師の認識

1. はじめに

1.1 研究の目的

学習者の学習段階が上がるにつれ、短文から短い作文、より長い作文、レポート、そして論文へと、学習者が作成に取り組む文章もステップアップしていく。それに伴い、論説文の場合、自説を支えるために自分ではない他の情報源からの情報を用いる、つまり他者からの情報を引用する機会が増えていく。特に日本語学習と自身の専門研究に同時進行で取り組む留学生は、研究成果を論じる前段階において、先行研究の概観の表し方や自説の展開における先行研究の用い方に苦慮する段階にいる場合が多いことから、引用の表現について特に手当てが必要である。

論文作成のための参考書や引用を対象とした研究においては、引用に使われる文型として「という」「とのことである」「と述べ(られ)ている」などが挙げられる。これらは、他者が発した情報の引用であることを示すためのいわゆる「引用マーカー」として代表的な形式である。

一方、一般的な日本語学習の過程では、自分以外の情報源から得た情報であることを示す機能を持つ文型として導入されるのは伝聞「そうだ」¹である。この伝聞「そうだ」は、一般に初級後半で「普通形+そうだ」の文型として提示され、授業では「【情報源】によると【情報内容】そうです。」のパターンを典型例として練習する。例えば、以下のような例文である。

(1) ニュースによると、未成年者による交通事故が増えてきたそうです。²

¹ 本稿では、伝聞「そうだ」を、その出現形である「そうだ」「そうである」「そうです」「そうなのだ」「そうなのである」を含めるものとする。

² 東京外国語大学留学生日本語教育センター(編)(2010)『初級日本語 新装改訂版 下』第26課(全28課)

(2) 天気予報によると、あしたは寒くなるそうです。³

しかし、学習者の作文を観察すると、学習者は「そうだ」を学習した後、他の引用マーカーを学習するまでの間、ある情報源から得た情報を引用する際に「伝聞」として学習した「そうだ」を数少ない手持ちの引用マーカーとしても用いている例が見られる。他にこのレベルの学習者が使える文型は、例えば「～は～と言った」「私は～と聞いた」「～と言われている」「～と書かれている」などが挙げられるが、実際には、学習者の作文では「そうだ」が多用されており、引用マーカーとしての使用が適切かどうか、検討すべき例が含まれている。

そこで本稿は、他者から聞いた話や、電話の伝言、ニュースなどからの「情報の受け渡し」で使う文型として学習した伝聞の「そうだ」を、学習者が作文やレポートなどで多く用いている、という現象に注目する。そして、学習者による運用実態を探ることを通して、論説文の引用としての文体的な適切性について考察し、情報の受け渡しである「伝聞」から、論文の「引用」へとどのように学習を進めていくべきかを検討し、教師側の伝聞「そうだ」の文体的適切性に対する認識について探ることを目的とする。

1.2 先行研究

1.2.1 「伝聞」と「引用」の関係

「伝聞」と「引用」を対象とした研究では、その定義や用語の使われ方は様々である。例えば、中島(1992: 21)は『引用』と『伝聞』を区別する大きな要因は、元の話者の心的態度をそのまま伝えるか、新たに伝え手が自己の心的態度をもとに述べるか、にある」としている。また、蓮沼(2015: 24)は先行研究を統合して『引用』は、発言内容・思考内容が言語で再現された場合を指すのに対し、『伝聞』はもっぱら言語情報の入手と取り次ぎに関わる様式として捉えられていることが分かる。」と述べている。

一方、両者の連続性も指摘されている。蓮沼(2015: 24)は、「両者の峻別は必ずしも明確であるとはいえず、連続性を有していることが示唆される。」とし、また小西(2011: 175-177)も、伝聞と引用との連続性に関する仮説として、「従来異なるものとして区別されてきた伝聞と引用を、『情報源の有無』という点から再構

³ スリーエーネットワーク(編)(2013)『みんなの日本語初級Ⅱ 第2版 本冊』第47課(全50課)

成できる可能性」を指摘している。

定義や区別の違いは、分類の観点による違いにも起因するものとして、小西(2011: 172-175)では、「日本語学的な観点からの分類と、日本語の使用を念頭に置いた日本語教育学的な観点からの分類は、異なる可能性がある」、「日本語学的な伝聞・引用の区別ではなく、他者からの情報であることを示すという機能的な共通性が重要度をもつと言える」と指摘している。その上で「日本語教育における伝聞を『他者からの情報であることを示す』機能をもった表現と位置づける」としている。

このように、伝聞と引用との間に隣接性あるいは連続性があること、そして両者が共通の機能をもつことが、学生と教師双方にとって、個々の認識の違いを生み、使い分けを難しくしているのではないかと考えられる。

1.2.2 伝聞「そうだ」について

伝聞の「そうだ」については、前後の接続形式や機能、判断性、主体性、他の形式との差異などが研究されてきた。

日本語記述文法研究会(編)(2003: 175)では、「(する)そうだ」は、情報伝達に際して、その情報が他者から取り入れたものであるということを表す。」として、「他者からの情報によって知りえたことを知識としてたくわえ、それを聞き手に伝達する」という「基本的な用法」と、「単に情報をとりつぐ、伝言的な用法」を挙げている。

一方、前述した中島(1992)の定義のように、伝聞の「そうだ」は話し手の主体的判断が関与している、とする主張もある(澤西2002・渡邊2014)。

先に述べた「引用と伝聞との連続性」を、蓮沼(2016: 25)はスケールに図示し、「ト言ッテイル」を引用、「ソウダ」を伝聞の典型的特徴を有するものとしてスケールの両端に位置づけた。その上で「『ソウダ』は、第三者からの言語情報の取り次ぎという『伝聞』に特化した機能を担う形式であり、所与と見なされる言葉を発話の場に再現する『引用』の機能は本来的に有していない」(蓮沼2016)としている。

また小西(2011: 169-171)は、文字言語と音声言語のコーパス⁴による分析を通

⁴ 音声言語は「日本語話し言葉コーパス(CSJ)」、文字言語は「現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」による。

し、「[ソウダ]は文字言語と音声言語とで振る舞いが異なっている」とし、音声言語においては、「ソウダ」は丁寧体に偏って使用されていること、普通体基調の音声言語では用いられにくく、「(んだ)って」がその役割を担っていることから、「[ソウダ]は文体と媒体との関連が極めて強いと言える」と述べている。

では、実際に学習者は文章表現のなかで「普通形+そうだ」をどのように使っているだろうか。

2. 研究の内容と方法

本稿では、日本語学習者の文章表現における伝聞「そうだ」の学習レベル別出現状況を明らかにし、論説文の引用としての文体的適切性を検討する。研究方法として、以下のコーパスを用いて量的に分析し、そこから得られた用例を質的に分析する。

まず、アカデミック・ジャパニーズを学んでいる日本語学習者が伝聞「そうだ」をどのように運用しているかレベル別に比較するため、初級から超級まで8レベル別の収録がある「JLPTUFS作文コーパス」⁵を用いて出現状況を調査する。次に、得られた用例から、情報源にはどのようなものがあるか、その種類を割り出し、「伝聞」と論説文の「引用」の境界について検討する。

さらに、論説文における使用の文体的適切性を検討するために、添削・誤用情報のある「日本語学習者作文コーパスなたね」(以下「なたね」)⁶と「日本語学習者作文コーパス」⁷とを用い、教師が伝聞「そうだ」を文体的にどのように評価しているかを確認する。

2.1 日本語学習者の伝聞「そうだ」のレベル別出現状況

2.1.1 研究方法

伝聞「そうだ」のレベル別出現状況を「JLPTUFS作文コーパス」から検索・抽出

⁵ 東京外国語大学留学生日本語教育センター(2011年3月)。初級から超級まで8段階のレベル、55カ国の学習者が書いた1,515の作文データを収録。

⁶ ©2002-2014 Hinokiプロジェクト。東京工業大学、中国・西安交通大学において収集したもの、「インド・プネー市学習者コーパス」を中心に、学習者数192人、285件の作文データを収録。

⁷ ©2010 科研グループ「自然言語処理の技術を利用したタグ付き学習者作文コーパスの開発」。韓国語・中国語母語話者である初級から上級の日本語学習者304名分の作文データを収録。

するため、SimpleKwicLister⁸を用い、「sakubunTXT」全テキストファイル(1,515ファイル)を検索対象に指定して行った。検索文字列は「そうだ」の出現形とし、「そうだ」「そう(である/です)」「そうなの(だ/である/です)」で検索を行い、いわゆる伝聞「そうだ」の用法と判断できるものを抽出するため、様態「そうだ」、指示詞「そうだ」にあたるものを排除した。形では「普通形+そうだ」で一見して伝聞「そうだ」のようであっても、用例を精査したところ「様態」と判断できる例が数例あり、以下のような例⁹はデータから除外した。

(3) 私の生活は楽しくて、面白いそうです。(2009120010042205)

2. 1. 2 分析結果

調査・分析を行ったところ、以下のような結果が得られた。総文数24,406文のうち、伝聞「そうだ」を含む文は、148文で全体の0.61%であった。「そうだ」の出現形は、「そうだ」「そうである」「そうです」「そうなので」があり、各レベル別¹⁰にみると、以下のように出現している。

表1 「JLPTUFS 作文コーパス」における伝聞「そうだ」のレベル別出現状況

	レベル								
	全体	100 入門～ 初級	200 初級 後半	300 初中級	400 中級 前半	500 中級 後半	600 上級 前半	700 上級 後半	800 超級
そうなので	1					1			
そうである	26			2	3	9	3	4	5
そうだ	76			4	45	19	1	3	3
そうです	54	1	2	8	5	30			
「そうだ」の 出現文数	148	1	2	14	53	59	4	7	8
各レベル 総文数	24406	1652	1564	5288	3857	6688	986	3027	1344
100文あたり 出現率	0.61%	0.06%	0.13%	0.25%	1.37%	1.52%	0.41%	0.23%	0.59%

⁸ 秋澤委太郎(アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター)により開発された OS X 用コーパス検索ソフトウェア。http://www.iucjapan.org/akizawa/SimpleKWICLister.dmg

⁹ 用例の後の()はコーパスの作文番号、下線の数字はクラスレベルである。

¹⁰ 「『JLPTUFS 作文コーパス』のご使用にあたって」(2011年3月)による当時の設定。

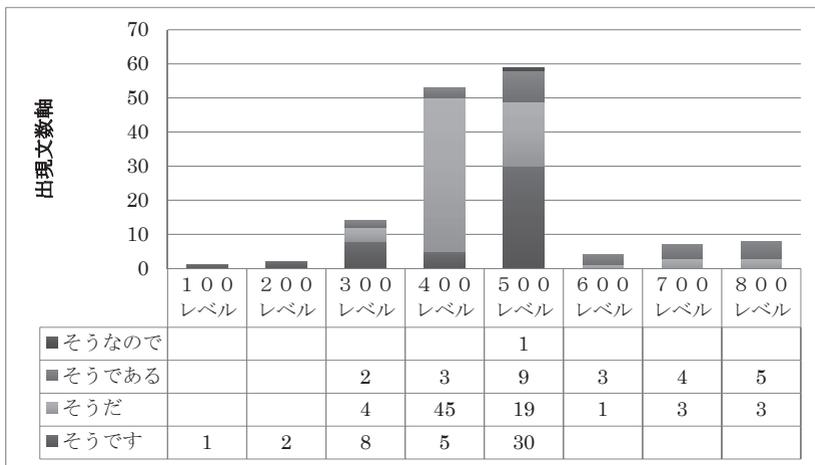


図1 「JLPTUFS 作文コーパス」における伝聞「そうだ」のレベル別出現文数

2.1.3 レベル別の傾向

100レベルは1例、200レベルは2例のみの出現であった¹¹。初級レベルで未習の可能性もあり出現は少なく、いずれも文体の形式は「です・ます」体で、情報源は「個人から聞いた話」であった。

400-500レベルはサンプル数が多い分、「そうだ」を含む文も他のレベルより多く出現しているが、レベルごとに100文あたりの出現の割合をみたところ、500レベルが1.52%、400レベルが1.37%と、出現率も他のレベルに比べて高かった。他のレベルより多く出現している理由として、初級後半で導入された文型の伝聞「そうだ」が定着し、学習者が積極的に用いるようになってきていることが考えられる。また、特に400レベルでは教室活動のタスクとして「インタビュー調査」を行い、その報告発表用の原稿が作文データとなっているためであると考えられる。

500レベル以上は、資料やデータを情報源にしているものが多く見られた。これは、データに基づいて説明する、配布資料を使うなど教師による教室活動の指示があったためであると考えられる。

¹¹ なお、抽出された例文のうち、200レベルの8例中6例、300レベルの17例中2例が、形式は「普通形+そうだ」であったが、その内容から様態の「そうだ」と判断され、200-300レベルでは文法的な間違いが目立った。

2. 1. 4 情報源の分類

抽出された用例における引用部分の情報源を分析したところ、特定の個人から直接得た話、一般的な知識、メディア（新聞・ニュース・インターネットなど）、公開されている調査・データ、論文（著者の意見）などがあつた。

「～によると」「～によれば」などをともなつて情報源が明確に示されているものは、出現文数148例中16例であつた。「～によると」「～によれば」を伴わない「○○さんは日本語を勉強するときにストレスを感じるそうです」、「彼の趣味はまんがを読むことだそうだ」（下線は筆者）のように、情報源が推定できる例は34例であつた。また、「そうだ」を含む文中で情報源が明示されていなくとも、それ以前に情報源が述べられているものもあるが、ここでは「そうだ」のある同一文中に「～によれば」「～によると」を伴う情報源が明示されている用例において情報源の分類を行う。

以下は、「そうだ」と同一文中において「～によると」「～によれば」を伴う情報源別の用例である。①～⑤は、自分に向けて発信された身近な情報源（伝聞と言えらるもの）から、より一般に共有することを目的として多くの人へ向けて公開された情報の順とした。表記・誤用などは原文のままであるが、下線は筆者らによるもので、点線が情報源、実線が引用マーカーとしての伝聞「そうだ」である。用例の後の（ ）はコーパスの作文番号、その下線部分はクラスのレベルである。

①特定の個人から直接得た話

- (4) 私のせんばいの話しによると、●●大学の国さいかんけいのプログラムはすばらしいそうです。(2009110010070701)
- (5) ともたちから日本についてきいたんですが、日本はぎじゅつがともしんぼしているそうです。(2009220010021505)
- (6) 友達の話によると、ロナド選手はブラジルにもとても有名ですが、最近はちょっと太くなって、去年と比べると、今年よりサッカーの技術がうまかつたそうです。(2009120010070804)
- (7) ●●さんはストレスの原因が三つあるそうだ。(2009240022102010)
- (8) ストレスを感じる時、留学生たちはどのような方法をやっているのだろうか、クラスメートたちはインタビューしてみた。中国からの留学生●●●●●は沢山な宿題がある時にストレスを感じるそうだ。(2009240022102004)

(9) 両親によると、私の生まれる前にソ連の最初のコンピューターが216教室くらいだったそうだ。(2010170020051404)

「特定の個人から直接聞いた話」として特徴的なのは、100-200レベルの3例がすべてこのカテゴリーだったことである。また、400レベル53例のうち、42例が授業内タスクによるインタビュー調査の内容であった。インタビューで個人から直接聞いた話を説明するために「そうだ」を用いていることについては、伝聞「そうだ」のもつ本来の機能から適切だと考えられる。

②一般的な知識

(10) 日本では行列の出来る店が多いそうだ。(2009140020052003)

(11) 漢字学習に対する人の一般的な主張は漢字の覚える時間が長すぎるし、その時間は新しい言葉などを習得するのに使った方がいいそうだ。
(2010140020052008)

(12) イタリア語にあることわざによると、人間は素晴らしいことが数えきれないほどありますが、一つできないのは一暮らしそうです。
(2009250021110204)

(13) 日本語の敬語はたしかに難しい。留学生の私がかかるしんでいるところか、日本人さえ難しいらしい。会社の新入社員は敬語のくんれんまで受けているそうだ。(2009170030072302)

「一般的な知識」によるものと分類したものは、「～によれば」「～によると」などをともなって情報源が明確に記されてはいなくても、かつて人から聞いた話や雑学的に読んだ話など、常識的・一般的とされるような情報であると考えられるものであった。

③メディア(新聞・ニュース・インターネットなど)

(14) このごろ新聞やテレビによると、外国の有名なファッションモデルさんがむりやりダイエットをして死ぬこともあるそうだ。(2009130030042313)

(15) 朝日新聞に次のような事件が記載された。酔っ払って入浴したり、パンツのままで浴槽に入ったりする外国人の船員が珍しくはないそうである。
(2009280040102705)

想定に反して少なかったのが、情報源がメディアのものである。情報源が明確に記されているものは上記2例しか見当たらなかった。初級で導入される「天気

予報／ニュース／記事によると」は実際には少なかった。

④公開されている調査・データ

- (16) 世界銀行の2009年の統計によれば、ナイル川の水質汚染のせいで国内総生産の8%の損失を与えるそうです。(2009250021012106)
- (17) U. S. Census Bureau¹²によると、2002年にアメリカの道路に約2400万台のSUV型のライト・トラックがあるそうです。(2009150020062902)
- (18) 2008年のグアテマラの教育機関の調査によるとグアテマラ政府が国中でスペイン語の学習および使用を促す努力をしたにもかかわらず、55%のグアテマラ人はスペイン語を話せないため、コミュニケーションの問題が生じているそうだ。(2009150030071507)

この場合の「そうだ」は個人的に伝え聞いたものではないことから、許容しにくいようである。この情報源の用例が多く見られたが、前述の通り、データに基づいて説明する、配布資料を使うなど、教師から与えられた指示や課題があったためであると考えられる。

⑤専門家の学術的主張

- (19) 実はロバート・サムプソンというハーバード大学の社会学者によるとラテンアメリカの移民のおかげで犯罪発生率が減少してきたかもしりないそうです。(2009150020060413)

この他、(19)のような学者の個人名や「専門家によると」など、研究者・専門家による主張や論文・著書等が情報源のものは3例のみであった。このような学術的主張を引用する場合には、「という」「とのことである」と共起している用例が多く見られ、使い分けを認識できている傾向が窺える。

2.1.5 考察

以上の結果から、情報源の種類、発信媒体（音声言語か文字言語か）、文章の種類（作文・レポート・論文など学術的な度合い）の、それぞれの観点によって伝聞「そうだ」使用の適切性が変わるようである。その許容度の高低を以下のように示してみた。用例の分析から、「そうだ」の許容度が⑤に向かうほど低くなり、

¹² アメリカ合衆国国勢調査局（注は筆者）

③と④の間に境界があると考えられる。

表2 伝聞「そうだ」使用の許容度

許容度	情報源	発信媒体	文章の種類
↑高	①特定の個人から直接得た話 ②一般的な知識 ③メディアからの情報	音声言語	作文
↓低	④調査機関 ⑤専門家の学術的主張	文字言語	レポート 論文

2.2 教師側の認識

2.2.1 研究方法

「日本語学習者作文コーパスなたね」と「日本語学習者作文コーパス」は、日本語学習者から収集した作文に対し、日本語教師による添削を基にした誤用タグを付与していることが特徴である。これらのコーパスを用い、伝聞「そうだ」の出現状況、添削状況を調査した。文字列「そうだ」「そう(である/です)」「そうなの(だ/である/です)」で検索を行い、伝聞の用法のみ抽出した。

2.2.2 分析結果

日本語学習者作文コーパス「なたね」を検索したところ、伝聞「そうだ」を含む文は200例抽出され、誤用(太字と下線は筆者)¹³として抽出されたのは以下の2例のみである。(括弧内は、作文ID)

(20) 私たちには、普通で感覚で住宅を作りたいと言う気持ちがあるにだ
そうです → そうである。(139_f)

(21) 科学技術が速く発展していて、パソコンや携帯電話など 電子用品 → 電子
機器を使っている人はますます多くなり、漢字の書き方も → を忘れてし
まう人もいますそうです。(中略) 以上からみれば、道理がある そうです →
ようですが、私はそう思いません。(098_a)

(20)の誤用の対象は、「文体の不統一」となっているが、これは「です・ます体；

¹³ ウェブ上では、太字部分がゴシックで修正箇所は茶色、修正例は緑色で示されている。

- (22) あるテレビ番組によると、日本人の若者の多くが占い師に見てもらったり、占いの本を買ったりしたことがあるそうだ。
- (23) しかし、同番組によれば、最近はやっとした楽しみのためというよりも、不安や悩みがあるとすぐに占い師に頼り、就職や結婚さえも決めてもらう人が増加しつつあるという。
- (24) ガイドラインの解説によれば、このガイドラインの目的は、よりよい終末医療実現にある_____。(答：という／そうだ)

上記2点の教科書では、伝聞「そうだ」を引用として用いると説明されているが、鎌田・仁科(2014)の第I部「単語を言い換える；第4課ジャンルによる使い分け」においては、「講義や講演などに関する内容や感想を書く場合には使うことができても、調査に関するレポートや論文では使わない表現があるので、注意が必要」なものとして、「③「～そうである」は、使わない(p27)」と、「そうだ」を許容していない。以下の(25)は、不適切なところを見つけて下線を引き、代替の表現を示す練習問題である。

- (25) 観光白書によると、家族旅行の回数は、親が子どもであった時の経験によるところが大きいそうである。(答：という)

このように、教科書によって、伝聞「そうだ」を引用として用いるか否かが異なり、学習者だけでなく教師側もどの説に従うか、迷いが生じることが懸念される。そのことが学習者の運用、教師側の添削未チェックにつながるものと考えられる。

さらに、伝聞「そうだ」の使用を複雑にしている背景に、文体的要因との関連が強いという側面があることは、庵他(2001: 215-216)も指摘している。すなわち、「そうだ」と「という」「ということだ」は「ほぼ同じ意味」だが「文体差」があり、「という」は書きことばでのみ用いられ、「そうだ」「ということだ」は「話しことば・書きことばの両方」で使われる、というものである。こういった点を使い分けの困難さの一因であると見られる。

タスクで課されたインタビューをまとめる際には、「そうだ」を用いることは妥当であろうが、調査結果やデータなどを示す際には論説文の文体としての適切性という観点のもとに添削を行うことが求められ、教師側の意識化が必要となる。

3. おわりに

今回の調査により、特に中級レベルの日本語学習者が自説を支える例として他

から得た情報を示す際に、伝聞「そうだ」を多く用いていることが明らかとなった。さらに、教師側の添削状況からは文法的な正確さで添削を行っているため、伝聞「そうだ」を論説文のなかで使用するのは不適切であるという認識がない様子も窺えた。

アカデミック・ジャパニーズの習得の過程にいる学習者は、取り組む課題のレベルが上がるのにもない、作文からレポート、論文へと学術的になっていく文章のタイプに適する表現を選ぶことを学ばなければならない。情報源が「個人的話」「ニュース」の場合は「伝聞」として「そうだ」を使うことは適切であるが、情報源が「データ」「著者の主張」などである場合、引用マーカーとしては「そうだ」ではなく「という／ということである」を使うべきであり、情報源の種類によって引用マーカーを使い分ける必要がある。

今回の調査により、伝聞「そうだ」は中級に入ってから多く使われるようになっていくことが明らかとなった。この時期にこそ、情報源、課題のタイプやジャンルに応じた引用の仕方を意識し、適切に使うようシフトしていかななければならない。それは学習者と教師の双方において意識化する必要がある。また、本稿における伝聞「そうだ」の分析は筆者らの語感によるものであったため、「引用」としての適切性や許容度に関してより客観的な判断基準を明らかにすべく、さらなる調査が今後の課題である。

※執筆分担：1は石田、2は高野が主に執筆担当し、相互に加筆修正を行った。

3・4は石田・高野が協議しながら共に執筆し、高野がまとめた。

引用文献

- アカデミック・ジャパニーズ研究会(編)(2015)『改訂版 大学・大学院留学生の日本語 ②作文編』アルク
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘(2001)『中上級を教える人のための日本語 文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 石黒圭・筒井千絵(2009)『留学生のための ここが大切 文章表現のルール』スリーエーネットワーク
- 鎌田美智子・仁科浩美(2014)『アカデミックライティングのためのパラフレーズ練習』スリーエーネットワーク

- 小西円 (2011)「使用傾向を記述する —伝聞の[ソウダ]を例に一」森篤嗣・庵功雄編『日本語教育文法のための多様なアプローチ』, 159-181. ひつじ書房
- 澤西稔子 (2002)「伝聞における判断性、及びその特性 —『そうだ』『らしい』『とのことだ』『ということだ』『と聞く』の談話表現を中心に—」『日本語・日本文化』, 28: 28-49. 大阪大学
- スリーエーネットワーク (編)『みんなの日本語 初級Ⅱ 第2版 本冊』(2013)スリーエーネットワーク
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター (編) (2010)『初級日本語 新装改訂版 下』凡人社
- 中島孝幸 (1992)「不確かな伝達 —ソウダとラシイ—」『三重大学日本語学文学』, 3: 15-24. 三重大学日本語学文学研究室
- 日本語記述文法研究会 (編) (2003) 第4章「認識のモダリティ」『現代日本語文法』, 133-178. くろしお出版
- 蓮沼昭子 (2016)「『ソウダ』と『ンダッテ』—伝聞と引用の間—」『日本語教育連絡会議 (2015) 論文集 Vol.28』, 23-35.
- 渡邊淳也 (2014)「いわゆる伝聞『そうだ』について」『文藝言語研究 言語篇』, 65: 19-39. 筑波大学

分析使用コーパス

- 「JLPTUFS 作文コーパス」東京外国語大学留学生日本語教育センター (2011 年 3 月)
- 「日本語学習者作文コーパスなたね」©2002-2014 Hinoki プロジェクト
<<http://hinoki-project.org/natane/>> (2016 年 11 月 28 日閲覧)
- 「日本語学習者作文コーパス」©2010 科研グループ「自然言語処理の技術を利用したタグ付き学習者作文コーパスの開発」
<<http://sakubun.jp.org>> (2016 年 11 月 28 日閲覧)

Analysis of the Reported Speech Marker *souda* Observed in Japanese Learners' Writing: Stylistic Appropriateness as a Citation Marker in Expository Writing

TAKANO, Aiko ISHIDA, Eriko

The reported speech auxiliary *souda*, as an expression for indicating that the source of information is other than the writer himself, is generally introduced in the second half of an elementary course as the sentence pattern: plain form + *souda*. In compositions by Japanese learners, *souda* is frequently used as a citation marker. To find out if Japanese learners' usage of *souda* is stylistically appropriate for citations in expository writing, we conducted surveys of three different corpora of writings by Japanese learners and discuss our findings.

We performed a qualitative analysis of a sample of usage examples, and considered the stylistic appropriateness of the use of *souda* in expository writing in these examples. We grouped the examples by type of information source, and found that when the source was something an individual said or news, use of *souda* was appropriate. However, when the source was data or an author's opinion, instructors determined that the usage example was a citation and the citation marker *to iu* should have been used instead. These were the cases in which the use of *souda* was not appropriate.

Furthermore, as evidenced by instructors' lack of corrections, we discovered that Japanese instructors consider the use of *souda* as a reported speech marker to be grammatically correct, but have no awareness that *souda* is not stylistically appropriate in expository writing.

We discovered that, from the perspective of academic Japanese, as a learner's level increases, and the level of writing increases from short compositions to reports and research papers, when learners want to indicate that the source of information is other than themselves, it is necessary for them to shift to using stylistically appropriate citation markers such as *to iu*, and for both learners and instructors to be aware of this.